

## はじめに

2015年9月開催の国連サミットにおいて採択された持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals : SDGs) は、地球上の「誰一人取り残さない (leave no one behind)」ために2030年までに達成すべき国際目標を示したもので、17の目標と169のターゲットで構成されています。SDGsは前身のミレニアム開発目標 (Millennium Development Goals : MDGs) と異なり、開発途上国のみではなく、先進国も取り組むことが求められるユニバーサルなものです。保健分野の目標には、「あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する」が掲げられ、13のターゲットについてグローバル指標が定められています。「すべての人が適切な予防、治療、リハビリ等の保健医療サービスを、支払い可能な費用で受けられる状態」を意味するユニバーサル・ヘルス・カバレッジ (universal health coverage : UHC) を実現するためには、近くに医療機関がないなどの物理的アクセス、医療費の自己負担が高いなどの経済的アクセス、サービスの重要性が感じられないなどの社会慣習的アクセスの三つのアクセスの改善に加え、提供されるサービスの質の向上が重要です。特に、貧困層に対する医療ならびに社会保障制度の整備や教育方法の開発は、疾病構造の変化とパンデミックなどの公衆衛生上の危機の回避につながります。

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) のパンデミックによって、医療だけでなく、人々の暮らしを支える政治・経済を含む、あらゆる領域が大きな影響を受け、私たちの生活は一変しました。これまで人類が経験してきた感染症のパンデミックは、貧困などの経済的、社会的な格差を背景に、保健システムの未整備な開発途上国で起こってきました。しかし、COVID-19のパンデミックは、日本をはじめとした医療資源の豊富な先進国でも起こり、これまでの感染症との疫学的な違いが示されました。人との会話が感染リスクになることから、三密回避のために、隣の人と一つ飛ばしの座席に座ることを、これまで誰が予想したでしょうか。人に会うことで感染リスクが高まることから、オンラインを活用した遠隔授業が急激に普及し、授業を学校の外で受けることも普通の生活になりました。

このように、長い間、当然と考えられてきたものが、今まで考えもつかなかったものになり、いつの間にかそれが当たり前になってしまう「新しい生活様式 (新常態) (new normal) への劇的な転換が起こっています。新常態における看護活動では、既存のケア方法では対応できない、新たなケア方法の開発が求められることが予測されます。新たなケア方法の開発によって、ケアを受ける人のニーズに合わせたケア方法の選択が広がることを期待できますが、既存のケア方法と新たに創出されたケア方法のどちらが効果的かを見極めるための研究も必要になります。多様な場で生活するさまざまな

健康レベルにある人々の、新たな生活様式によって生まれた看護ケアやサービスの効果の科学的根拠も求められるようになるでしょう。しかし、看護実践の根拠を科学的に示していくことは容易ではありません。本書では、冒頭に研究の初心者が看護実践の根拠を導き出すための科学的アプローチの方法とプロセスを、看護研究ロードマップに沿って段階的に示しました。本文では、学生の皆さまが看護研究の基本や要点に対する理解を深められるように、研究課題（テーマ）の選定から研究論文の執筆まで、具体例を示して解説しました。また、巻末付録には、重要な統計用語についての一言解説を掲載しました。

看護研究は本を読んで頭で考えるだけでなく、実際に取り組んでみて、初めて理解できるものです。私の卒業研究の経験を紹介します。臨地実習で、身体的負荷を少なくするためにベッド上排泄を余儀なくされている患者さんが「便秘」で苦しんでいる姿を見るたびに、本当にベッド上排泄は負荷が少ないのだろうか、と疑問に思っていました。卒業研究のテーマを決める時期になり、臨地実習で一緒のグループだった3人で、私がずっと温め続けてきた排便時の身体的負荷について、文献検討を通して議論を続けました。その結果、排便時の体位の違いによる身体的負荷として、循環系への影響を調べることになりました。排便の影響を調べるためには、模擬的ではなく実際に排便しなければなりません。データを得るために、毎日、交代で被験者になって、試行錯誤を繰り返しました。データが得られても、どう解釈していいのかわからないこともありました。しかし、一緒に悩み、考え、ディスカッションできる仲間とそれを温かく見守ってくださった先生の存在はとても大きな支えであり、毎日が楽しくて仕方ありませんでした。もちろん卒業研究が論文として一つの形になったときの喜びはとても大きく、達成感でいっぱいになりました。

この経験をもとに、一人でも多くの学生や看護職の方々に研究の喜びを味わってほしいと願っています。本書を通して、読者の皆さまの看護研究に対する興味を引き出し、看護研究へと誘うことができれば、この上ない喜びです。